

動植物における生活環境の保全・再生

佐々木 礼子・吉田 博昭(武庫川づくりと流域連携を進める会)

はじめに

当会「武庫川づくりと流域連携を進める会」は、兵庫県武庫川流域委員会の有志委員と流域住民が設立した住民参画型の流域総合治水の実現をめざす流域住民と行政のパートナー、中間支援組織団体である。武庫川水系河川整備基本方針・整備計画の基となった流域委員会の提言書にある住民主体の武庫川づくりの実現を目指し、情報と人材のシンクタンクとして武庫川講座、武庫川ウォッチング、流域一斉水質調査等の武庫川守活動を行なっている。ここ数年、温暖化による豪雨が急襲するなか、兵庫県立人と自然の博物館の研究者がリードする下流における住民主体の小さな自然づくりを応援しながら流域全体で多様な生きものが共存できる河川環境を再生・創出し、安全で安心して暮らせる住民主体の流域づくりのサポートを目指してさまざまな企画を行っている。

背景

武庫川は上・下流域で緩やかな河川勾配をもち、中流域でダイナミックな流れと人の介入できない秘境である多様な生きもののパラダイスを創出する先行峡谷(V字谷)「武庫川峡谷」を有する全国的にも珍しい魅力ある河川である。とくに本川は流域各市における中心市街地の暮らしと文化の根源として大切な役割を果たし、有史以来まちとともに成長してきた。しかし、近年の温暖化による異常豪雨は一級河川を含めて全国で第10番目の資産を有する武庫川流域圏の氾濫域を洪水の危機にさらす一方で、洪水の攪乱によって河川区域内の多様な生きものたちの暮らしが大きく改変されることで新たな生態系が形成されるという自然界の摂理をみることができる。

そこで当会では、武庫川水系河川整備計画に盛り込まれた環境への配慮を大切にしながら、川づくりリーダーを養成しつつ、住民主体の小さな自然再生による武庫川づくりへの取り組みをスタートさせようと、「武庫川づくりフォーラム」「武庫川づくりシンポジウム」を企画した。このようにして武庫川流域に残る豊かな生物資源の調査・保全・再生活動の実践を積み上げることで、エコトーンを創出し、流域住民に親しまれる武庫川づくりから治水にまで繋げる活動にチャレンジしようとしている。

①武庫川水系河川整備計画における環境の考え方 武庫川水系河川整備計画概要パンフレットより抜粋

水系全域の河川において多様な生きものを育むためには、まずは本川の中上流域で中心市街地ゾーンを流れる武庫川に残された良好な自然環境を守り、下流域の市街地を流れるゾーンでは環境改善に取り組む必要があります

優れた「生物の生活空間」の保全

- ・ 緩やかな流れが特徴の上流部では、この環境を好むタナゴ類やトゲナバタムシなどが生息しており全国的にも極めて生物多様性の高い場所となっています。
- ・ 中流部では、峡谷特有の植物であるサツキやアオヤギバナなどが洪水によるかく乱を受けながら生育しています。
- ・ 市街地を流れる下流部では、水際の護岸工事や河川敷の公園利用など、人を中心とした利用が行われ、また、外来種の繁茂も見られますが、カワラサイコが生育するれき河原が一部に残っています。
- ・ 武庫川では、本支川に数多くの横断工作物があります。武庫川峡谷より下流の本川では、魚道により、魚類等の移動の連続性は確保されていますが、その多くが構造的な問題から、アコ等の遡上・降下に支障をきたしています。また、武庫川の河口部では、汽水性、回遊性の魚類等の種数が少なく、かつてあった干潟もほとんどみられない状況です。こうしたことから、河川工事に際しては、効果的に環境改善を行う必要があります。

良好な景観の保全・創出

- ・ 川が本来有する自然景観を基調として、武庫川らしい景観の保全・創出に努めます。
 - ・ 自然景観を基調とした武庫川らしい景観を保全・創出するため、武庫川を特徴づける自然環境や、下流域のクロマツ・アキニレ等の樹木、武庫川峡谷の自然景観、瀬戸内海と日本海を結ぶ「ふるさと桜づつみ回廊」など、地域固有の景観資源を保全するとともに、歴史・文化といった沿線の地域特性に配慮しつつ、地域と一体となって景観形成に努めます。
 - ・ 河川利用と人と河川の豊かなふれあいの確保
 - ・ 治水や自然との調和を図りつつ、水とふれあえる場の確保に努めます。
 - ・ 都市近郊にある武庫川では、多様な河川空間利用が行われています。このことから、自然環境及び治水計画との調和に留意しつつ、水と緑のオープンスペースとしての河川利用など、多様な要請に応えられるよう努めます。
- また、地域の人々に武庫川の自然景観や水辺を利用した環境に関する学習を支援するため、関係機関と連携して、河川利用の利便性の確保を図るとともに自然を生かした水辺の倉出や施設整備の整備に努めます。

環境の「2つの原則」

武庫川を特徴づける多種多様な動植物が、今後も生息・育成できる豊かな自然環境の保全・再生に努める

【原則1】流域内で種の絶滅を招かない

□武庫川水系の在来種が将来的にも武庫川水系で持続的に生息・生育しうることを目標とする。

【原則2】流域内に残る優れた「生物の生活空間」の総量を維持する

□優れていると判断された場所を、治水事業後も質と量の両面で確保することを目標とする。

調査方法

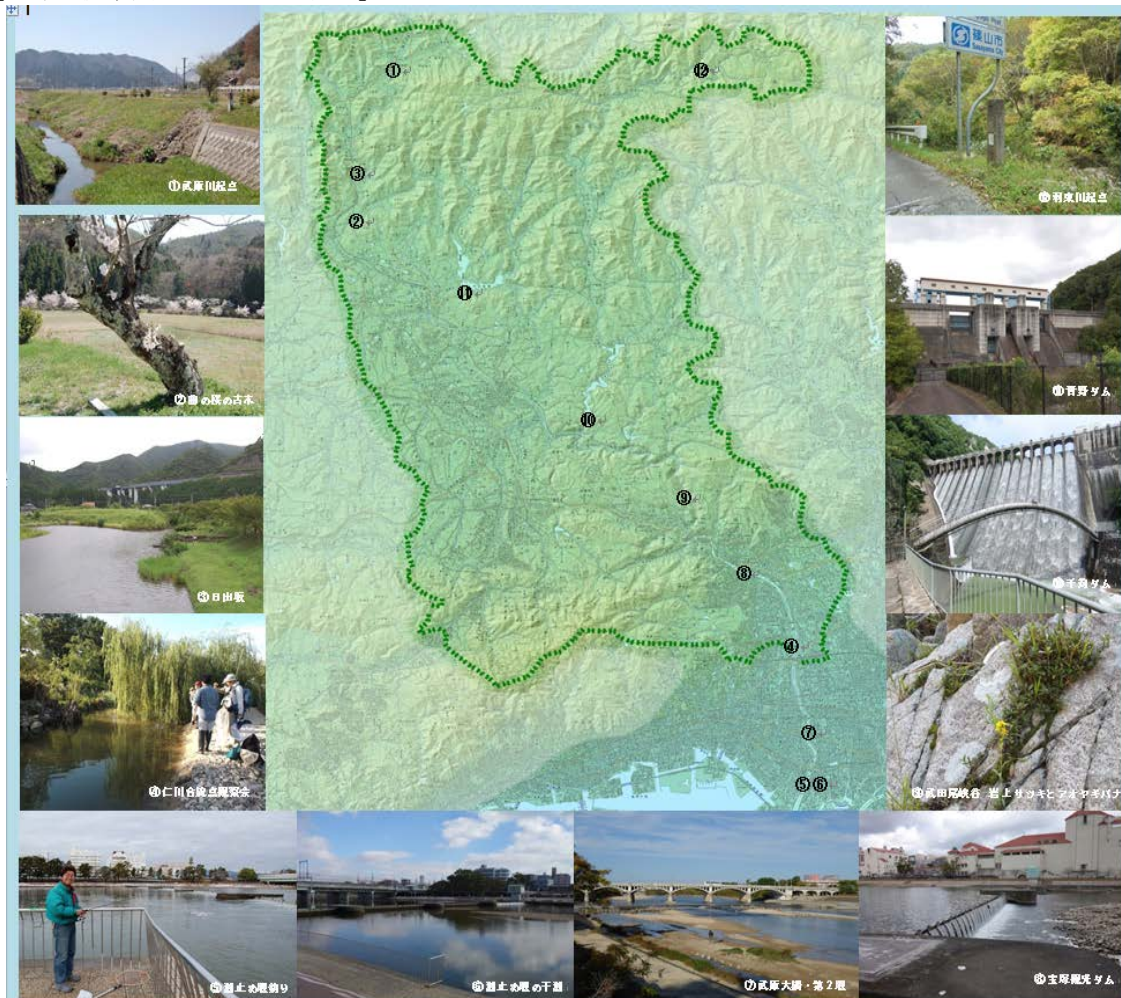
以上の武庫川づくりのなかで、流域住民の手による「動植物における生活環境の保全・再生」活動を行うための基礎調査として、これまでの8年におよぶ武庫川守活動のなかから流域圏全体において以下のスポットを抽出し、さらに、手はじめに川づくりの実践を行う下流域における活用状況を調査した。

河川敷の広い下流域において活動を行うのにあたり、今後その活動を担う可能性のある流域住民として、現在河川施設内で何らかの活動を行っている人々がどのような活動を行っているのか。また、「大雨による出水の後の実態」と以下の視点から利用状況について8年間の武庫川守調査の写真の中から実態を表している写真の分析、抜粋作業を行った。

- 活用状況 ①スポーツへの活用
 ②レクリエーションへの活用
 ③エコトーンの実態

調査結果

【武庫川流域圏におけるスポット】



流域に大雨が降り、武庫川本川に大規模な出水があった後の下流域の実態とどのような人がどのような目的で河川施設内に足を踏み入れるのかは以下のとおりである。

【大雨による出水後の実態】

武庫川は暴れ川、
六甲山系からの土砂流出量が多く下流域は自然と人為的攪乱を受け変化が激しい。

2004年浚渫工事中の仁川合流点、
2005年の真っ平らになった仁川合流点、
洪水に取り残された魚を狙って集まる子供たち、
浚渫後10年で元に戻った、
潜水橋の上を越える洪水、
川を甘く見ると、時には事故も起きる、

【スポーツへの活用】

河川敷は色んなスポーツを楽しむ人がやってくる。緩やかな河口部はカヌー練習場になっている。

マラソン大会、
少年サッカー、
河口部はカヌーの練習場、
お年寄りが集まってグランドゴルフしていた、
手軽な憩いの場でありちょっとしたお出かけスポットとして親しまれている。

【レクリエーションへの活用】

松が似合う武庫川、傾いた松で遊ぶ子供たち、
多くの人が楽しむコスモス園



騒音を気にしてか河原で練習する人が目立つ。

武庫川で遊んだ昔話りに余念がない老夫婦。

【エコトーン(人と生き物接触域)の実態】

自然が戻ると最初に子供が戻り、子供に連れられて大人まで戻り学びの場が変わる。



自然が戻るとアユが戻ってきた。



ウナギも戻ってきた。



魚や虫と一緒に子供たちも戻ってきた。



生きものが戻ると観察会が楽しめる空間になる。

【武庫川下流域】



まとめと考察

自然が戻り、河原に近づけるようになると子供たちが来て、大人を連れてくる。これこそが、「人と人、生きものと人がふれあう川らしい使われ方」である。まずは、川に親しむことから始まり、市民・行政が一緒になって川づくりを楽しむことから参画と協働の川づくりは始まると考える。そして、これらの活動を通して豪雨に見舞われた際に武庫川のどこが危険なのかを知り、治水・流域対策として個人にどのような草の根活動ができるのか、最も安全な避難ルートはどこなのか、までを知ることにつながる。我々は、武庫川流域に生息する生きものから人までが安全に安心して暮らせる環境づくりを目指している。